

中国詩詩語「敲枕」(枕をそばだつ) 用法変遷論

宋詩篇

中山大輔

一 はじめに

日高睡足猶慵起
小閣重衾不怕寒
遺愛寺鐘欹枕聽

日高く睡り足りて 猶ほ起くるに慵し
小閣 衾を重ねて 寒を怕れず
遺愛寺の鐘は 枕を欹てて聴き

香爐峯雪撥簾看
匡廬便是逃名地
司馬仍為送老官
心泰身寧是歸處
故鄉可獨在長安

香炉峯の雪は 簾を撥けて看る
匡廬は便ち是れ名を逃るる地
司馬は仍ほ 老を送るの官なり
心泰かに 身寧きは是れ帰處なり
故郷可に独り長安に在るのみならんや

(「新釈漢文大系 白氏文集(三)」参照)

右の詩は白居易の「香爐峯下、新卜山居、草堂初成。偶題東壁 重題其三」、所謂「遺愛寺の鐘の詩」である。殊に頷聯「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看」の箇所は『和漢朗詠集』にも採られ、我が国でも平安時代以降広く愛詠されてきた。また、「香炉峯の雪いかならむ」との中宮定子の問いに、御簾を

上げて答えたという清少納言の逸話の典故としても知られている。

しかしそれだけ人口に膾炙した詩句でありながら、傍線部の「欹枕」という語については、近年までどういった動作・体勢を指すのか「定説がない」とされる状況にあった。そこで別稿「唐詩詩語「欹枕」の漢文訓読語としての「枕をそばだてて(聞く)」「側臥」(平成二十五 安部・中山 以下前稿と略記する)にて「敲枕」の意味や訓読などについて考察を試みた。本研究はその続篇として、中国詩詩語「敲枕」(和訓「枕をそばだつ」)の宋詩における用法を調査するものである。特に「敲枕」の持つ「横になりながら音や物を見る、聞く」「のんびりと寝そべる」などの細かな情景描写の用いられ方や、宋代の詩に特徴的な「敲枕」の用法に注目し精査していきたい。

二 詩語「敲枕」概略

まず本題に入る前に、簡単に詩語「敲枕」の概略について確

認しておく。詳細については前稿を参照して頂けると幸いである。

「敲枕」は中唐期（八世紀中頃）から中国において使われ始めた詩語（特に韻文で用いられる語）の一つである。日本には平安期に伝わり、そのごく初期の段階から「枕を敲つ」と訓じられていたと見られる（前稿―五）。

「敲枕（枕をそばだつ）」の意味としては、横に臥しながら、眠るというわけでもなく身体を左右に向ける（傾ける）などしている様子を表す（前稿―三）。例えば先述の『遺愛寺の鐘の詩』の「遺愛寺鐘欬枕聽」であれば、「遺愛寺の鐘の音を横向きに臥しながら聴く」意味になる。つまり、「敲枕（枕をそばだつ）」の「枕」は実際の寝具としての枕を意味している訳ではなく、横になっている時の身体を表す換喩（メトニミー）として使われており（前稿―六（一））、語としては「身体を敲（傾ける）」ことを示しているのである。

また「敲枕」には『遺愛寺の鐘の詩』の用例のように「横になつて物音を聞く」情景の他にも、音を聞いたりせず単に「のんびり寝る」情景、又は寂しさなどで「輾転反側する」情景で詠まれる用法もある（前稿―三（四））。こうした情景の用法については今回の調査の課題でもあるので後で詳述する。

なお、「敲枕」の「敲」については他に別の違いで「欬」「欬」の用例があるが、語としての意味の相違は、あるとしても本稿での論点にとっては微小であると考えられる（前稿―二）ため、以下便宜上統一して「敲枕」と表記する。但し詩本

文の用例や他書の引用においてはそれぞれ原文の字体に従う。ちなみに『宋詩』検索では字体ごとに異なった検索結果が示されるため、別の用例として扱っているようである。

三 調査方法・凡例

宋代（西暦九六〇―一二七九年）の詩をほぼ全て網羅している詩文検索サイト『宋詩』から「敲（敲・欬）枕」の用例を集め、一例ずつ解釈を行って用法の史的変遷について調査した。但し同じ宋代においては詩ではなくむしろ詞が流行しており、「敲枕」の用例数も詞の方が多く残されているが、今回は紙幅の都合上宋代の詩の分野に範囲を絞った。詞における用例については機会を改めて取り上げたい。

掲出した詩文については『宋詩』に拠り、旧字体等も原文のまま表記した。但し、訓読文においては読み易さのため旧字体等は新字体・通用字体に改めた。長編の詩では必要箇所のみ訓み下したが、参考までに全編を白文で載せた。また特に記載の無い限り、訓み下しは筆者が試みたものである。訓み下しそのものは詩意の把握の参考に留まるが、誤りがあればご教授いただければ幸いである。

（注）詞：中唐の頃に起こり、宋代に盛んになった韻文の形態。当時の歌謡曲の歌詞の意。一句一句の長さがまちまちなので長短句とも呼ばれる。

四 用例と情景的用法——宋詩篇——

(一)「欹枕」の情景

実際に用例を見ていく前に、「欹枕」が用いられる情景について整理しておきたい。「欹枕」の情景的意味については以下のように分類できる。以下分類は「中国詩語「欹枕」用法変遷論—唐・五代詩篇—」（平成二十六 中山 以下唐詩篇と略記する）に準じた。

・幹意 身体を左右いずれかに向けて床に臥せる体勢、所謂側臥。仰向け・うつ伏せではない。また、睡眠状態にはなく、目は覚めている。

・感懷 ……身体を横たえながら何かを見たり、何かの音を聞いたりして、物思いにふける様子。寝ながらに何かを見たり聞いたりする体勢（身体を横に向ける）を示しており、ここでは「欹枕」の語自体に悲哀や自適の感情は含まれていない。例「樹暗草深人靜處、卷簾欹枕臥看山」（蘇軾「三月二十九日二首其二」）など。

・悠緩 ……のんびりごろごろと横になる様子。睡眠を取るために床に就くのではなく、悠々緩々と物臭さや気怠さのために寝転がっている体勢を示す。仰向けなどになり、じつと寝入る様子とは区別される。付帶的に何かを見たり聞いたりする様子が重なる

こともあるが、あくまでもごろごろと横になっている情景を表すために「欹枕」が使われている。

例「公退留賓誇酒美、睡餘欹枕看山横」（歐陽修「留題南樓二絕」）など。

・憂悶 ……心に思ふところがあり、悶々と寝付けないでいる様子。すんなりと寝入ることができず、輾転反側している様子を示す。こちらにも悠緩の場合と同じく、見る・聞く情景を伴うことがあるが、思い悩んで睡眠できないでいる情景が中心に置かれている。ここでは悲哀の感情が薄くても、見る・聞く動作が無く思慮に耽っている情景についてはこの憂悶に分類した。例「挑燈今夕意、欹枕故園心」（范成大「次韻子永夜雨」）など。

宋詩の用例についても、一例一例この分類に当てはめて解釈を行っていききたい。

(二) その他の特徴的用法

また今回宋代の用例を見ていくに当たっては、次のA、B二点の用法にも着目していきたい。

・用法A ……「欹枕」と共に「見」「看」「聞」「聴」等の感覚の動詞が用いられている。「見る」等が「欹枕」と連動した動作として使われており、情景的には感懷の場面になることが多い。「欹枕」して何かを見ている場面であっても、語として「見」等が

無い場合は除く。例「睡餘欹枕看山横」（歐陽修「留題南樓二絕」）など。

・用法B：「欹枕」と共に「卷簾」等、簾を巻く動作が詠まれている。「欹枕」と「卷簾」が対になっているか等の位置関係は問わない。例「卷簾欹枕臥看山」（蘇軾「三月二十九日二首其二」）など。

(三)「欹枕」作者・用法一覧

『宋詩』によると宋代の詩における「欹枕」の用例数は全四十二例である。以下にその宋詩で「欹枕」の用例のある作者全十一人を、それぞれ活躍した年代順に並べた。表記の仕方は左の通り。

作者名（生存年西暦 出身地）○「欹枕」用法○

出身地については現在の地名も併記し、末尾の「欹枕」用法は先述した「感懷」・「悠緩」・「憂悶」の三分類で示した。用法A、Bについては作者に一例でもその用法の用例があれば付した。また出身地の下には「欹枕」の用例数を丸数字で表し、情景別の用例数も囲み内に丸数字で示した。生存年と出身地については『中国学芸大事典』（大修館書店）、『支那人名辞書』（吉川弘文館）に拠った。なお殆どの人物は官職の都合等で各地を転々とし、その先々で詩を詠んでいるため、出身地については用法に深く関係していないと考える。一つの参考項目として捉えて

いただければと思う。

また宋は時代的に西暦一一二七年を境に北宋と南宋に分けられるが、今回の作者では陸游と范成大の二名のみが南宋期に入り、それ以外は北宋の人である。

王禹偁 おうしやう (九五四-一〇一三)	濟州鉅野 山東省	③ 感懷②・悠緩①
歐陽修 おうようしやう (一〇一七-一〇七二)	吉州廬陵 江西省	② 感懷②
蘇舜欽 そしゆん (一〇〇八-一〇六四)	梓州銅山 四川省	① 感懷①
王安石 おうあんせき (一〇二一-一〇六六)	撫州臨川 江西省	② 悠緩①・憂悶①
蘇軾 そしやう (一〇三六-一一〇一)	眉山 四川省	⑥ 感懷④・悠緩①・憂悶①
蘇轍 そてつ (一〇三九-一一一三)	眉山 四川省	① 感懷①
鄧忠臣 とうちゆうじん (一〇七五頃 湘陰)	① 憂悶①	
晁補之 ちやうほし (一〇五三-一一一〇)	濟州鉅野 山東省	① 憂悶①
賀鑄 かちゆう (一〇六三-一一三〇)	衛州 河南省	③ 憂悶③
陸游 りくゆう (一一一五-一一九三)	越州山陰 紹興	⑮ 感懷⑧・悠緩①・憂悶⑥
范成大 はんせいたい (一一二六-一二四五)	吳郡 江蘇省	⑦ 感懷④・悠緩①・憂悶②

時期	情景		
	北宋期 (王禹偁・賀鑄)	南宋期 (陸游・范成大)	計
感懷	10	12	22
悠緩	3	2	5
憂悶	7	8	15
計	20	22	42

この調査結果からは、宋代を通して「感懷」と「憂悶」の用法が多く、のんびりとした「悠緩」の用例が少ないという傾向が見られる。特に時期ごとにおいての流行の変化などは無かった様である。ただ殆どの作者が「見」「聞」等の感覚動詞を伴うAの用法を使っていることを考慮すると、宋代の流行としては「見」「聞」「動く」動作を伴う「感懷」の用法がやや優勢と捉えられる。

また南宋期の陸游（十五例）と范成大（八例）がそれぞれ多く用例を残している点が特徴的である。これだけ多用されていることから、今回『宋詩』検索では挙がらなかったが、南宋期に「敲枕」を詠んだ詩人が他にもいた可能性も考えられる。

（四）用例詳解

では作者ごとに用例を確認していきたい。用法A、Bについては作者ごと、「感懷」などの情景分類については取り上げた詩ごとに付記した。作者名下の表記は前項の作者・用法一覧に従う。また、詩文等の掲出方法については三章調査方法・凡例を参照されたい。

・王禹偁（九五―一〇〇）③感懷②・悠緩①A

庶子泉

感懷

物形固天造 物景不自勝 泉乎未遇人 石罅徒流迸

宮相政多暇 行樂躡巖磴 發蒙漲為溪 幽致茲焉盛

唐賢大曆後 峭壁刻名姓 我來一何暮 今秋始乘興

山勢環有缺 山門壺引柄 戶挹清泚姿 頗愜幽閑性

味將春茗宜 光與曉風暝

架竹落僧廚 架竹 僧廚に落ち

遠聲入清磬 遠聲 清磬に入る

何當宿禪室 何ぞ禪室に宿すべし

欵枕終夜聽 枕を欵てて終夜聴く

飲多病骨換 照久塵襟向

銷盡謫居愁 無心治歸艇

*清磬 寺院で、僧を呼び集める時に使った楽器。

宋代の詩における「敲枕」の用例として最も早いのがこの王禹偁の詩である。ここでは「架竹」の落ちる音を「敲枕」しなから「聴」いている場面であり、「敲枕」と「聴」が共に用いられている点（用法A）に注意しておきたい。

・歐陽修（一〇〇―一〇七）②感懷②A

留題南樓二絶（之二）感懷

醉翁到處不曾醒 醉翁 処に到りて曾て醒めず
問向青州作麼生 問ふ 青州に向かふに作麼生^{＊そもん}
公退留賓誇酒美 公退きて賓を留め 誇るに酒美し^{＊ほま}
睡餘欹枕看山橫 睡^{＊すい}餘 枕を欹て山横を看る
＊作麼生 いかげ。疑問の意を表す。＊睡余 眠りから
覚めた後。ねおき。

歐陽修は唐宋八家に数えられ、北宋中期の文壇の領袖ともされる人物である。彼は二首の詩において「敲枕」を用いているが、その門下生である蘇軾、蘇轍、王安石や、交流のあった蘇舜欽もそれぞれ「敲枕」の用例を残しており、彼の周囲で「敲枕」が詩語として広まっていた様である。但しそれぞれの「敲枕」の用法については統一されていない。

この詩では、寝起きでぼんやりしながら「敲枕」して山を「看」ている情景である。ここでも「敲枕」と「看」という感覚の動作が関わって用いられている（用法A）。歐陽修のもう一首の用例でも「開軒見遠岫、欹枕送歸雲」の様に「敲枕」と「見」が一緒に用いられており、「敲枕」は「横」になりながら何か景色を見る」言葉として意識していたと考えられる。

・蘇軾（一〇三六—一一〇一）⑥感懷④・悠緩①・憂悶① A・B

三月二十九日二首其二 感懷

門外橘花猶的皤 門外の橘花 猶ほ的皤とし^{＊てきれき}

牆頭荔子已爛斑 牆頭の荔子^{＊れいし} 已に爛斑^{＊ろはん}
樹暗草深人靜處 樹暗く草深く人靜かなる處
卷簾敲枕臥看山 簾を卷きて枕を敲てて臥し 山を看る
＊的皤 白く鮮やかなさま。＊爛斑 様々な色が混ざり
合つて美しいさま。

無題 感懷

簾卷窗穿戶不扃 簾を卷きて窓を穿け戸扃さず^{＊あ}
隙塵風葉任縱橫 隙塵風葉 縱横なるに任す^{＊よこ}
幽人睡足誰呼覺 幽人睡り足るも誰か呼び覺まさん^{＊あ}
敲枕床前有月明 枕を敲てるに床前に月明有り
＊幽人 人里離れて靜に暮らす人。

蘇軾は蘇東坡とも呼ばれ、その代表作「赤壁賦」などで日本においても広く知られた詩人である。残した詩作数が多い（『宋詩』検索で二八一四首）ということもあるが、六首もの詩で「敲枕」を用いている。また、弟の蘇轍や師の歐陽修も詩で「敲枕」を詠んでいる。

蘇軾の「敲枕」の用法は、師の歐陽修と異なり「見」・「聞」といった感覚の動詞を殆ど伴わない特徴がある（六例中、引用した「三月二十九日二首其二」中の「卷簾敲枕臥看山」が唯一の例外）。ただ動詞は無くても、情景としては右の「敲枕床前有月明」（無題）の例の様に、「敲枕」しながら景色や物を見ている用法が殆どを占める。

また特筆すべき点として、今回挙げた二首の様に「敬枕」と「簾を巻く（卷簾・簾卷）」動作を共に詠む用法（用法B）が挙げられる。

・賀鑄（1051-1120）③ 憂悶③ A・B

冠氏縣齋書事寄滄陽朋遊 憂悶

小閣燒香麝煎濃 小閣に香麝を燒き煎するに濃し

翠苔庭院綠陰風 翠苔 庭院 綠陰の風

卷簾燕自雙飛去 簾を巻くに燕自づから双び飛び去り

敬枕人方半夢中 枕を敬てるに人 方に半ば夢の中

秋鬢先於懷縣令 秋鬢 県令に懷くに先んじ

春愁多似義城公 春愁 多く義城公に似る

西園酒伴無消息 西園酒を伴いて消息無く

欲寄魚箋水自東 魚箋を寄せ水自づから東せんと欲す

* 綠陰 こかげ。 * 県令 県の長官。 * 魚箋 紙の名前。また、書信のこと。

北宋期の詩としては最後（西暦一二二七年南遷して南宋となる）の「敬枕」の用例を残しているのがこの賀鑄である。主に詞を得意とした人物とされる。右の詩では、先述の蘇軾の用例の様に「簾を巻く（卷簾）」表現を「敬枕」の対にしている点（用法B）が注目される。

・陸游（一二三〇-一二九六）⑮ 感懷⑧・悠緩①・憂悶⑥ A

雪後尋梅偶得絕句十首 又 悠緩

雙鵲飛來噪午晴 雙鵲飛び来たりて午晴に噪き

一枝梅影向窗橫 一枝 梅の影 窓横に向かふ

幽人宿醉閑欹枕 幽人 宿 醉に閑かに枕を欹て

不待聞香已解醒 香を聞くを待たずして已に解醒

* 宿醉 二日酔い。 * 解醒 二日酔いを覚ますこと。

幽思 感懷

雲際茅茨一兩間 雲際茅茨 一両の間

春來幽春日相關 春来たりて幽かなる春日に相關す

臨窗靜試下巖硯 窓に臨みて静かに試す下巖の硯

欹枕臥看靈壁山 枕を欹て臥して看る靈壁の山

紅練帶飛俱意得 錦熏籠煖尚香慳

今朝社過添惆悵 高棟巢空燕未還

題韓運鹽竹隱堂絕句三首 又 感懷

靜處知君解策勳 静処 君を知る解策の勳

爐香裊裊起微雲 炉香裊裊として微雲起る

岸巾不往尋青士 岸巾し青士を尋ね往かず

欹枕還應對墨君 枕を欹て還りて応に墨君に對す

* 岸巾 頭巾を脱いで額を露わにすること。 * 墨君 墨絵に描かれた竹。

陸游は詩に長じ、南宋四大家に数えられる人物である。残した詩作も非常に多く、『宋詩』検索で九一六四首、「敲枕」の用例数についても十五例と今回調査した中で最も多い。また同じく南宋四大家と称され交流のあった范成大も「敲枕」の用例を多く残している。

「敲枕」の用法としては、数が十五例もあるということもあって一貫せず、様々に用いている。一例目の「幽人宿醉閑敲枕」の様に酔ってぐだけた体勢で寝転がる「悠緩」の情景を詠んだり、二例目「敲枕臥看靈壁山」の様に「看」を伴って横になつて山を眺める情景を表したり、それぞれの詩の情況に合わせて「敲枕」が用いられている。ただ一つ陸游の「敲枕」の共通点としては、一例目の「梅影」、二例目の「靈壁山」、三例目「墨君」の様に、「看」といった動詞の有無を問わず、臥せながら「見る」又は注意を向ける対象が同時に詠まれているという特徴がある。

・范成大（二二六・二九三） ⑦ 感懷④・悠緩①・憂悶② A

次韻子永夜雨	憂悶
辦作長愁客	辦作す長愁の客
工哦苦雨吟	工みに哦ふ苦雨の吟
挑燈今夕意	灯を挑げて今夕の意
欽枕故園心	枕を欽てる故園の心
漏屋疏疏滴	漏屋疏疏として滴り

空檐細細樹 空檐に細細と樹む
相過巷南北 巷南北に相過ぐるに
屐齒怕泥深 屐齒泥の深きを怕る
*辦作 旅支度をする事。*故園 ふるさと。*屐齒
下駄の齒。

枕上聞蒲餅焦

感懷

曉寒燕雀噤春陰 曉寒く燕雀 春陰に噤み
珍重清黃度好音 珍重なる清黃 度に好き音
窗色熹微欽枕聽 窗色熹微にして枕を欽てて聴く
夢成舟檣竹溪深 夢成りて舟を檣すに竹溪深し
*清黃 黃は笛の舌。*熹微 日の光がかすかなこと。
夕暮れの色。

范成大もまた陸游らと共に南宋四大家に数えられた人物であり、詩をよくした。「敲枕」の用例も陸游に次いで多く、七例残している。（范成大的詩作数は『宋詩』検索で一四七一首）「敲枕」の用法の特徴としてはまず一点、引用した「窗色熹微欽枕聽」（枕上聞蒲餅焦）の様に、「敲枕」と感覚動詞「聴」を結び付けている点（用法A）が挙げられる。范成大的「敲枕」の用例七首の内、四例が「聴」を伴って用いられており、「敲枕」と「聴」の関係を強く意識していたと考えられる。なお同じ感覚の動作でも「見」や「聞」を共に用いた用例は無く、特に「聴」に限定していた様である。

またもう一つの用法として、「欵枕故園心」(次韻子永夜雨)の様に「**欵枕**」して物思いに耽る情景に用いたものもある。この場合には特に何かを「**聴**」などの動作は無く、悶々と思いを巡らす**憂悶**の様子として「**欵枕**」が使われている。

五 まとめ

(一) 情景・用法

宋代の詩における「**欵枕**」を見てきたが、詠まれる情景については**感懷**と**憂悶**の用例が多くを占めており、のんびり横になる**悠緩**の例は余り見られなかった。

白居易と元稹といずれが早く**欵枕**の二字を用いたかは、詳らかでないが、両人の使用例には差異があるわけである。元稹は眠れぬ夜の輾転反側を**欵枕**で表現しようとしたのであり、五代から宋へと、とくに、詞の分野では元稹と同じ方向【引用者註…**憂悶**の方向】に用いた場合が多いが、

右は詞についての岩城氏の指摘であるが、この**憂悶**の方向に用いた場合が多い、と言うのは、宋詩の分野においても半ば当てはまることが分かった。ただ、宋詩においては何かを「見る」などのために「**欵枕**」する**感懷**の用法も多いことに注意しておかなければならない。

またその**感懷**の用法にも関わるが、宋詩においては「**欵枕**」と共に「**見**」「**聞**」といった感覚の動詞を伴った用法(用法A)が多く見られた点についても注目しておきたい。この「**見**」「**聞**」などの動詞を伴う用法は、中唐期における「**欵枕**」の初期の用例に多かったが、その後の唐末、五代十国期の用例では殆ど見られなくなっていたという経緯がある(唐詩篇一五)。よって恐らく宋代の詩作者たちは、「**見**」等を伴う中唐期の「**欵枕**」の用例を参考にし、それに倣って「**欵枕**」を詩に詠んでいたのではないかと推測される。加えて、今回の調査でも複数見られた「**簾**を巻く」動作を伴った用法(用法B)も、中唐期の白居易に始まるものであり、宋詩の「**欵枕**」の用法は唐詩、とりわけ中唐期の詩の影響を強く受けていたことを確認できる。

(二) 「**欵枕**」詩人グループ

今回調査した詩作者について、『中国学芸大事典』の解説などから、それぞれの交流関係ごとに次のようなグループ分けができた。

(歐陽修グループ) 歐陽修、蘇舜欽、蘇軾、蘇轍、王安石、

晁補之

(陸游グループ) 陸游、范成大

(関連無し) 王禹偁、鄧忠臣、賀鑄

この様に、王禹偁、鄧忠臣、賀鑄の三名を除いて、「**欵枕**」を用いた作者たちにはいずれも結び付きがあったようである。

こういった親交関係を元にして、「敲枕」のような詩語も人から人へと広まっていったのではないかも考えられる。

以上、本稿では、唐代における「敲枕」の意味用法の変遷を調査した唐詩篇（平成二十六 中山）の姉妹編として、特に宋代の詩における意味用法を検討した。唐代、とりわけ中唐期の用法を多く引き継ぎ、その影響の下変遷した宋詩の「敲枕」の特徴をある程度明らかにできたと思われる。更に続篇としての宋詞篇の調査は既に終えているので、別稿での報告を期したい。

【参考文献】

ここでは本稿に直接関わる文献のみ掲載した。「敲枕」「枕をそばだつ」各々に関連する文献については、安部・中山（平成二十五）の参考文献を参照されたい。

《辞書・資料・索引関係》

『新釈漢文大系 白氏文集』昭和六十三年 明治書院

近藤春雄『中国学芸大事典』昭和五十三年 大修館書店

難波常雄『支那人名辞書』明治四十五年 吉川弘文館

『宋詩』<http://cls.hs.yzu.edu.tw/QSS/home.htm> 元智大學、

北京大學計算機語言學研究所

《論文・研究書》（著者五十音順）

安部清哉・中山大輔「唐詩詩語「敲枕」の漢文訓読語としての「枕をそばだてて（聞く）」（側臥）」『学習院大学文学部の

研究年報』59 平成二十五年

岩城秀夫「遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴く」『国語教育研究』

第八号 昭和三十八年

埋田重夫「遺愛寺鐘欹枕聴」考『中國文學研究』十四期

昭和六十三年 早稻田大學中國文學會

中山大輔「中国詩詩語「敲枕」（枕をそばだつ）用法変遷論

―唐・五代詩篇―」『人文』12 平成二十六年三月 学習

院大学人文科学研究所

【付記】

本稿は安部清哉・中山大輔「唐詩詩語「敲枕」の漢文訓読語としての「枕をそばだてて（聞く）」（側臥）」（平成二十五年）、および中山大輔「中国詩詩語「敲枕」（枕をそばだつ）用法変遷論―唐・五代詩篇―」（平成二十六年）の続篇として、中国宋代の詩においての「敲枕」の用法をまとめたものである。詩語「敲枕」（枕をそばだつ）の調査を始めたそもそのもの切っ掛けには中山の卒業論文（学習院大学）があるのだが、安部清哉先生にはその卒論指導以降、多くご助言、ご指導を戴いてきた。本稿もまた、続篇を、との安部先生のご勸奨により実現したものである。なお本稿では「今回は自身の文体で」との先生のご意向・ご高配から、筆をお加えにはならなかった。安部清哉先生、並びに稿の提出に際しご協力戴いた学会事務の田中仁様には、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。